

---

# ケツァール、歌ってくれ

白馬 黎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ケツアール、歌ってくれ

### 【Nコード】

N9684Q

### 【作者名】

白馬 黎

### 【あらすじ】

人の言葉を話せない【口笛で話す鳥の民】のハイタカ の家に真つ黒な肌をした少女が迷いこむ。その歌声に惹かれた ハイタカ は彼女をしばらく家に置くことにするが……。 「俺は鳥なのか、それともお前と同じ人間なのか？」

原稿用紙換算42枚、完結済み。

(重複投稿：本家サイト「Empty Air」)

翡翠の翼を小刻みに震わせ、真紅の胸をふくらませて、雄のケツァールは恋を謳う。しかし雌は怯えた瞳で雄を見やるだけ、雄は振り返ってもらおうと長い尾羽を引き引き舞い始め。

不意に飛来した矢が雄ケツァールの胸を貫いた。胸を貫かれたまま羽ばたき逃げるケツァール、だが天空から急降下してきた一羽のハイタカがその体を鷲づかむ。ようやくぐったりしたケツァールをハイタカはしっかりとつかみ直し、吹き矢の筒を手に立ちあがった男のもとへと持ち帰った。

ハイタカからケツァールを受け取った男はキョキョキョとハイタカのさえずりそっくりの口笛で愛鳥をねぎらい、獲物の胸から矢を抜き取った。それから足輪と縄で木につながれていた雌ケツァールに歩み寄って無造作に首をつかみ息を止め、雄ケツァールと共に皮袋へ入れる。

今日の収穫はおとりの雌も含めて四羽。まずまずといったところだ。ケツァールの大きさはカラスほど、獲物袋はずっしり重い。

男が口笛を吹けば肩の上でハイタカが応じる。再び空へ舞い上がったハイタカを見送り、男は獲物袋を肩にひっかけ帰路についた。

\*

彼の名は ハイタカ。【口笛で話す鳥の民】と呼ばれる一族の若者だ。鳥のハイタカは彼の 弟。この ハイタカ という名と共に与えられ一緒に育ってきた、まさしく弟のような鳥だった。

ハイタカ は森の縁、簡素な小屋に一人と一羽だけで住んでいる。部族にもよるが【鳥の民】は一人前になったら両親のいる家を追われるのだ。ここに一人と一羽で住み始めて三年、家を訪れるのは唯一の友人で羽細工の売人 ヘビクイワシ くらいなもの。ドア

がわりの大きな革を持ち上げれば、先に帰っていた 弟 が軽くさえずって 兄 たる彼を迎え入れた。

四羽のケツアールの首を落として血抜きをしていた時だ。ふと 弟 が入り口の革を見つめ、カチカチとクチバシを鳴らし始めた。「何かがそこにいるぞ」と言っている。鋭い、口笛で「危険はあるか?」と ハイタカ が尋ねると、 弟 は不安げに黙りこんだ。「わからない」。

一人と一羽は困惑の視線をかわしあつた。ピューマ、オオカミ、グリズリー、選択肢は増える一方だが答えは確かめてみないことにはわからない。彼らは町人が使う銃器の威力におそれをなしているのか、最近の煙のにおいをかいただけで逃げるものだが……。

ハイタカ は油断なく吹き矢を構えながら入り口へ向かった。後ろで 弟 が翼を大きく広げクチバシをカチカチ鳴らして威嚇のしぐさをとっているが、 弟 は夜目がきかない。太陽が木々の向こうに隠れようとしている今、援護に期待しすぎるのは無謀だろう。ほんのわずか革布をどけ、吹き矢の筒を差し入れ外を覗き 木の陰に隠れてこちらを見つめる影を見つけた。真つ黒な猿だろうか。猿なら問題ないと吹き矢をおろした途端、その「猿」の髪が長いことに気がついた。

猿ではない、真つ黒な肌をした人間の少女だ。ハイタカ は唾然として 弟 を振り返った。外の様子をまだ見ていない 弟 はまだクチバシを鳴らしながら「危険はあるのか、どうなんだ」と言いたげな目を向けている。

ハイタカ は一度顔をひっこめ、「危険はない」と明るい口笛を吹いた。 弟 にも見えるよう少し広めに革布をたくしあげたが、夜目のきかない 弟 に少女が見えたかは怪しいものだ。「どうする」と 弟 を見れば、 弟 は「危険がないならいい、兄貴の好きにしるよ」と言いたげに、定位置の止まり木に飛び乗りそつぽを向いた。

外に目を移す。ハイタカ の口笛に驚いたのだろう、少女の白

目が闇の中で大きく見えた。もういちど 弟 を見たが、 弟 は知らぬ顔で羽づくろいを始めている。

ハイタカ は意を決して革布をたくしあげた。

キーヨキヨ、キツキツキツキツ……。

口笛はハイタカの挨拶のさえざりだ。「俺は ハイタカ というお前は誰だ？」の意味になる。ここで相手が【鳥の民】なら、自分の名前になっている鳥の声で鳴き返してくるはずだ。ヘビクイワシ なら高い金属的な声で、ワタリガラス ならカポン、カポンと。

返事は返ってこない。どうしたものかと ハイタカ は鳥の声のため息をついた。

ハイタカ は町人の言葉が話せないのだ。前に ヘビクイワシ が一生懸命教えてくれたおかげで聞き取りは五歳児並みとはいえるものの、話すとなるとでんでんため。喉の構造でも違うのかもしれない。

キーヨキヨ、キツキツキツキツ……。

再びさえざり、 ハイタカ は革布をたくしあげたまま火のそばに戻った。このまま去るならよし、入ってくるようなら迎えて好きにさせればいい。夜が明ければ去っていくだろう。ヘビクイワシ のような酒を持ちこんで騒ぐ男なら考えものだが、相手は木陰でうづくまって震えている少女だ。悪さはしまい。

ハイタカ は無関心を装いつつ沸いていた湯をタライにあげ、ケツアールの体をその中へつけて羽毛をむしりはじめた。基本的に自給自足の生活だが、鋼の矢じりにブリキのタライ、手に入らないものはある。だから ハイタカ はこの時期になるとケツアールを狩り、羽細工を作って ヘビクイワシ に売るので。よほど高く売れるのだろう、ヘビクイワシ は意気揚々と町へ向かい、ハイタカ が欲しがっている品物に土産を三つ四つつけて持ち帰ってくる。

羽毛をむしってはブリキのコップに丁寧につめこみ、むしり終え

れば皮をはいで解体する。切つて串に刺し、炙りはじめた肉がこんがり焼けてきたころ、真っ黒な少女が ハイタカ の小屋に入ってきた。

弟 が翼をばたばたさせながら ハイタカ の肩に乗り、じつと少女を観察する。無関心を装い手を動かしながら横目で少女を見つめた ハイタカ だったが、とたんに少女のぎらぎらした視線とかち合ってしまった。

ハイタカ は手を止め、黙つて焼けた肉を少女に突き出した。少女はおずおずと受け取り、食べていいのかと言いたげに ハイタカ を見つめる。一瞬の後、たまりかねた様子でかぶりついた。

がりがりに痩せた少女だ、よほど腹をすかせていたのだろう。

ハイタカ が黙つて二本目の串を差し出すと、少女は受け取りがつかつ食らう。喉も渴いているだろうとコップを横に置いてやり、

ハイタカ も焼けた肉を 弟 と分けあい食べ始めた。

腹をすかせているときは獣じみ、目ばかり大きかったので、八歳に見えたが、落ち着いたところを改めて見てみるともう少し年かさらしい。十四、五歳くらいだろうか。明日になれば出ていくであろう少女だ、歳など見積もつてもしょうがないのだが。

やがて満腹したのだろう、所在なさに ハイタカ を見つめた少女に毛布を投げてやり、 ハイタカ 自身は火の始末をして予備の毛皮にくるまった。止まり木で胸に顔をうずめた 弟 の下、無言のまま横になる。

ハイタカ は朝が早いのだ。夕食をとつたらさつさと寝てしまふ。

「ありがとう……」

眠る寸前、聞き取れた声に ハイタカ は喜びを覚え、ヘビクイワシ に感謝した。

\*\*\*

夜明け前に起き出し、日の出と共に獵場へ向かう。ケツァール獵で一番難しいのは最初に雌を捕らえることだ。雌さえ捕らえてしまえば繁殖期の今、雄がひとりでに寄ってくる。

餌のトカゲの入った罾をひとつひとつ点検していく。ここはケツァールの森だ、三十個も罾をしかければどれかにケツァールが入っているものだが……今日は運が悪かったのだらう。入っているのはネズミが六匹とワタリガラスが二羽だけ、ほかは空だった。ネズミを 弟 にやり、ワタリガラスを獲物袋に入れる。腹の足しにはなるだらう。

ハイタカ は「帰るぞ」と空に向けて口笛を吹いた。雌ケツァールが捕まらなければ狩りはおしまいだ。樹上のケツァールに弓を向けてもまず当たらないし、 弟 の目と瞬発力をもってしても緑の保護色と持ち前の警戒心で逃げおおせてしまう。恋歌に夢中になつていなければ捕まる相手ではない。

空からの不満げな声を聞きながら ハイタカ は家へ足を向けた。捕らえた雌を殺さず飼っておけば楽なのかもしれないが、連れ帰ったケツァールは怯えに怯え、一晩のうちに狂い死んでしまう。これだけ警戒心の強い鳥が天敵たる人間と猛禽のそば、生殺しでとどめ置かれるのだから無理ないのかもしれない。

トカゲを捕らえてはしかけた罾の中に入れていく。大きなものは殺して獲物袋に入れた。

十何匹目のトカゲを捕らえ、これは持つて帰るべきかケツァールの餌にすべきか迷っていた時だ。ふと羽音を聞き、 ハイタカ は驚いて顔を上げた。先に帰っていたはずの 弟 が肩に急降下してくる。ハイタカ が肩にあてている革布をがっちりつかみ、目をぎよるぎよるさせた。

何かあったのだ。ハイタカ は空をにらんだ。 弟 が「違う、そっちじゃない、こっちだ」と言いたげに家の方向を見つめて翼を揺する。ハイタカ は怪訝に思つてそちらを見、ぎよっとした。

何かがあったなら、あの少女はどうした？

ぎりりと家のある方向を見つめた。差し迫った危険なら全力で逃げる。そうでなければ、かなうものなら危険の種類を確かめ、判断を下す。

控えめに口笛を吹いた。「弟よ、もう俺たちの家には近づかないほうがいいのか?」。弟はハイタカの肩にとまり体を硬くしたまま動かない。「わからない。だが危険があるのは確かだ」。

ハイタカは黙って家の方向を見つめる。グリズリーやピューマが家に入り込み、あの少女をズタズタにしているなら、弟はこんなはつきりしない返事をするわけがない。危険がある、危険があると騒いでハイタカに家から離れているよう警告するはずだ。山火事の場合も同じように警告するし、その場合は森中が大騒ぎになるからそれとわかる。

空気のおいをかぎ、耳をそばだてる。猛禽が急に舞い降りてきたというのに、騒ぐ鳥が一羽もない。トカゲは普通にいたし、ネズミが走る音もする。罨にはカラスもかかっていた。だが、この森に多いきれいな声で歌う鳥がごっそりいなくなっているようだ。

弟の言う「危険」の一端だろうか。

高く口笛を吹いた。「舞い上がれ、空高く。そこから見守っていてくれ」。弟が不満げにクチバシを鳴らす。翼を持たない兄を案じてくれるのはわかるが、もし何か鳥に影響を及ぼす危険があるなら弟は近づけないほうがいい。距離を置いて、猛禽の鋭い目で見張ってもらおう。

弟を見送り、聴覚と嗅覚に最大限の注意を払いながらハイタカは歩き出した。この密林、ハイタカ自身の視覚には頼れないが、そこは弟の目が補ってくれる。

最初は何の異常もなかった。ヤマネコが目の前を通りすぎていったくらいだ。

やがて鳥の声が聞こえてくると、ハイタカは緊張した。空を見上げて弟の姿を確認する。雲ひとつない空の中、ゆっくりと

旋回していた。異常はなさそうだ。

森の中にいなかった鳥は、家に近づくにつれどんどん増えていった。どうやら森中のきれいな声で鳴く鳥たちが、ハイタカ の家周辺に集結しているらしい。当然ケツアールの姿もあった。しかもあれだけ警戒心の強い鳥が、ハイタカ が吹き矢を構えてもまったく無頓着に、楽しげに飛び回っているのだ。もう素手でそのまま捕らえられそうな勢いだ。

ためしに手を伸ばし、ケツアールの長い尾羽をつかもうとした。

…… あっさりと掴めた。さすがに逃げようと暴れだしたケツアールを解放してやる。これは 弟 が泡を食って帰ってくるわけだ。夢のような光景、この世に突如出現した楽園。

木を組んで作っていた小さな家は緑に染まっていた。何十羽ものケツアールが屋根にとまり、爪をひっかけ柱にとまり、むろん地面にも群れて、楽しげに歌っている。黙って歩く ハイタカ の肩にもケツアールがとまり始めた。肩や背中に五羽のケツアールをくっつけ、家の正面に立つ。

とたん、ケツアールたちは魔法が解けたように恐慌状態に陥り、大慌てで飛び始めた。

実際に魔法が解けたのだ 家の前で歌っていた少女が歌をやめてしまったから。

「こんなに早く帰ると思わなかった」

高潮していた頬が見る見る間に色を失っていく。肌がこれだけ黒ければ顔色などわかるまいと思っていたが、灰でもなすりつけたかのような色にどんどん変わっていく。

「そうよね、あなたは鳥と話せる人だから。あのタカに聞いて帰ってきてちゃったのね……」

怯えた顔で後ずさる。舞い上がるケツアールの群れで空が翳った。

ハイタカ は黙って空を見上げていた。怯えた動物と向き合うときは目を合わせないのが賢明だ。ケツアールの巨大な群れが去り、再び空が明るくなってから少女の様子を横目でうかがう。泣いてい

た。うつろな目からぼろぼろ涙をこぼしている。

ハイタカ は 弟 を呼んだ。待つていましたとばかり舞い降りてきた 弟 を肩に乗せ、少女にタオルでもとってやるうと戸の革布をもちあげようとしたとたん。

家の中を猛烈な勢いで飛び回る鳥の姿に、ハイタカ は反射的に革布を閉ざした。革布に一羽がぶつかる感触がする。革ではなく木のドアなら死んでいただろう。恐慌状態、このままでは狂い死ぬ。「お礼をしようと思ったの。何羽かケツァールを呼んで、家の中に閉じこめて、出て行くつもりだった。でも私のバカ。歌うのが楽しくなっちゃって……。せつかくここまで逃げてきたのに」

ハイタカ は少女とドアを交互に見つめた。今日の収穫はカラス二羽とトカゲ数匹、ケツァールがいるに越したことはないのだが。ハイタカ はかすかに口元を歪めた。

夢のようなら、夢で終わらせよう。

革布を大きくたくしあげた。家の中にいた七羽のケツァールが大慌てで逃げ出していく。少女がびくっと顔をあげ、飛び去っていくケツァールを見つめた。

「どうして！ あなたはこの鳥を捕る人なんでしょう！」

涙にぬれた頬に血の気が戻る。

「いいの？ 逃がしちゃっていいの？ あの鳥は、一羽捕ればものすごいお金になるのよ」

ハイタカ は微笑を浮かべ、小屋からケツァールの羽のくつついたタオルを持ってきて少女に渡した。

タオルに顔をうずめて号泣する少女の肩に、革の肩当てを肩からはずしてひっかけてやる。そこに 弟 を乗せ、ハイタカ は散らかった部屋を片付け始めた。そこらじゅうに散った羽毛はありがたく缶に詰め、糞の汚れを布でこすって落としていく。知らず知らずの間に少女の歌を口笛で吹いていた。

口笛に歌声が重なった。少女が泣きながら、歌いながら、弟を肩に乗つけたまま、貸してやったタオルで床をこすっている。

ハイタカ は黙ってタオルを取りあげ、雑巾を渡した。それから今までより大きな口笛で曲を吹きだした。

「ねえ。私が歌ってケツァールが集まってきたても、捕ったり、しない？」

ハイタカ がうなずくと少女の目が丸くなった。

「もしかして言葉が通じてる？」

苦笑しながらうなずくと、少女はまじまじと ハイタカ を見つめた。

「【鳥の民】には言葉が通じないって聞いてたから。じゃあどうして一言も話さないの？」

ハイタカ はむつつりと口笛を吹き、話せるところまで教えてくれなかった。ヘビクイワシ を恨んだ。

「聞き取れるけど、話せない？」

ハイタカ はうなずいた。少女は「なーんだ」と歯を見せた。

「じゃあ名前を聞いても答えられない？」

ハイタカ はハイタカの声でさえずってみせた。

「キーヨキヨ、キツキツキツ。これが名前？」

少し感じが違うので ハイタカ は顔をしかめ、もう一度さえずってみせる。しかし、何度やってみても少女はハイタカの声を出せなかった。やはり喉が違うのだ。

「うーん、もういいや。私はシヨチ。お兄さん、シヨチって呼べる？」

「ピヨイ」

「シヨ、チ」

「ピヨ、イ」

少女は笑いだした。

「本当に言葉が話せないのね、オウムの方がまだ上手よ。じゃあ私がお兄さんに名前つけてあげる。お兄さんも私に名前をつけてよ」

ハイタカ は目をしばたき 弟 を見た。 弟 も目をぱちくりさせている。

「そうね、お兄さんも声に出しやすい名前がいいな。ピー、って音なら言いやすい？ ピント、とかどう？」

「ピーンオー」

「うーん、ちよつと違うけど私の名前よりは発音しやすそう。決まり！ ピントお兄さん」

ハイタカ はうなずき、弟 の頭を軽くたたいた。

「この子にも名前ね、どうしよつかないかな。キヨイは？」

「キヨイ」

「わあ、これは大丈夫ね！ 決まり。キヨイ！ あー、でもお兄さんの名前をキヨイにしたらよかつたかな。でも犬みたいな名前だし、やっぱりピントの方が格好いいよね。じゃあピントお兄さん、私の名前つけて」

さつきまでの泣き顔はどこへやら。ハイタカ は笑いながらさえずってみせた。「名前をつけて」と言われた時、これしかないと思っただ鳥の声。

ピッピッ、キヨオロロロロロ……。

「ケツアールの鳴き声ね。ピントお兄さん、なんで人間の言葉はうまく話せないのに鳥の鳴きまねはそんなに上手なの？ でも私は鳴きまねがしてほしいんじゃないか……あ、そっか、【鳥の民】は鳥の名前をつけるんだっけ」

ハイタカ がうなずくと、少女の顔が輝いた。

「私の名前は、ケツアール？」

そつだとうなずいてみせると、ケツアール は床に落ちていた羽を拾って髪に飾り、照れくさそうに笑った。

「ケツアール かあ、嬉しいな。でさ、ピントお兄さん。いまさらなんだけど、今晚もここに泊まって、いい？」

ハイタカ がうなずくと、ケツアール はもじもじと上目づかいに ハイタカ を見上げた。

「あんまり長くはないし、お礼にケツアールを呼び寄せるから、何日か泊まっていても嫌じゃない？ 私ね、ケツアールをこつや

って呼べるから、嫌な人に捕まっつてずつと働かされてたの。おもいつきり歌いたい、好きな歌を好きなように。それから……私、ケツアールが好き。私が歌って、ケツアールが来てくれたら、すごく嬉しい。でも呼んだケツアールが片端から殺されていくのは……。ピントお兄さんみたいに必要なだけケツアールを捕って、大事にその体を使うなら、わかるの。でも私のいたところの人は……」

ハイタカ の聞き取り能力は五歳児並だ。今までの話なら大体わかっていたのだが、この話はわかりづらかった。困って目をしばたかせている ハイタカ に ケツアール は苦笑いしてみせた。「ごめんなさい、変な話しちゃって。とにかくお礼はするから、しばらくここにいても、いい？」

ハイタカ が大きくうなずくと、ケツアールの目から再び涙がこぼれた。細い肩に 弟 を乗せたまま抱きついてきた ケツアール を抱き返し、頭をなでながら口笛を吹く。  
泣き虫ケツアール。かわいい子だ。

\*\*\*

「ピーイ、ン、オウー……」

喉を震わせ「自分の名前」を呼んでみる。

「ピヨ、イイ……」

「シヨチ」と呼びたいのに「声」は出せない。練習していれば、いつか、ちゃんと呼べるようになるだろうか。

弟 が ハイタカ の肩から飛び立った。

「ピントお兄さん、お帰りなさい！ キヨイモ！」

満面の笑みで ケツアール が手を振っている。とたん、歌の魔法が解けてケツアールたちが慌てふためき飛び始めた。それを見たケツアール もまた慌てて歌い始める。

ハイタカ はほほえみ、ゆったりと口笛を吹き始めた。

言葉が通じなくても大丈夫だ。笑えて歌えれば問題なし。

ギーッ、ギギギギギギ……。

四苦八苦しながら針に糸を通そうとしていた ケツアール が顔を跳ね上げる。ハイタカ は心配ないと ケツアール にほほえみかけて羽細工用の針を取り上げ、返事の口笛を吹いた。ケツアール は信じられないほど不器用で、一生懸命に針に糸を通そうとする彼女からいつ道具を取り上げようかと、ハラハラしつつ機をうかがっていたのだ。

形式通りの挨拶をしばらく交わしてからドアがわりの革布を持ち上げると、ヘビクイワシ が立っていた。ヘビクイワシ は【鳥の民】ではない。口笛で話せる数少ない町人だ。

「よう、ハイタカ！ ケツアールは捕れてるか？ 町の言葉は忘れてないよな？」

町の言葉で話しながら小屋に入ってきた ヘビクイワシ を笑顔で迎える。弟 がヘビクイワシ の広い肩に乗るのを横目に、

ハイタカ は ケツアール を振り返った。

ケツアール がいなくなっていた。おかしいなと小屋を見回してみれば、部屋の隅の毛皮を積み上げてあるところが不自然に盛り上がっている。

「ありやなんだ？ おまえ、犬かなにか拾ってきたのか？」

盛り上がりがふるふると細かく震え始めた。

ピツピツ、キヨオロロロロ……。

呼んでみるが ケツアール が出てくる気配はない。

「ケツアール？ もしかして人間なのか？」

ハイタカ は肩をすくめ、黙って ヘビクイワシ に羽細工の入った袋を突き出した。

「んー、そんなに怯えられても困るんだがなあ。べつにとって食いやしないから出てこいよ」

なおも呼びかける　ヘビクイワシ　をさえぎり、　ハイタカ　はもう一度、羽細工の入った袋を　ヘビクイワシ　の鼻先につきつけた。

「ほっとけってか？　わかったよ、わかったからそんな怖い顔しないでくれ。もうちょっと笑えよ、な？　お、よくよく見てみりや今回は豊猟じゃないか！　それにお前、細工もんの腕あげたなあ、男にしておくにや惜しいっ！」

ヘビクイワシ　は袋に入っていた羽細工をひとつひとつ検分し、持ってきた紙に値段を書きつけ始めた。

ハイタカ　のそばで毛皮の端が少しだけ持ち上がった。黙ってケツアール　の頭があるあたりをなでてやると、ケツアール　はやつと毛皮からはいだしてきて　ハイタカ　の背中に隠れるように座りこみ、　ヘビクイワシ　を見つめた。

「やつと出てきてくれたな、ケツアール　ちゃん。俺は羽細工の売人のボブっていう。【鳥の民】には　ヘビクイワシ　って呼ばれるけどな」

わざとらしく　ヘビクイワシ　はウィンクしてみせたが、逆効果だったらしい。　ハイタカ　の背中に回された腕に力が入った。

「なんでこんなでつかいおっちゃんか　ヘビクイワシ　なんて細っこい鳥の名前と思うかな。そりゃあ俺だって鳥でなくていいならバイソン　って名乗ったさ。ボブおじさんはバイソンの物まねが得意なんだぜ。ぶるる、ぶるるるる！」

鳴き声はさつぱり似ていないのだが、赤ら顔にもじゃもじゃ頭、ごつごつしているのに妙に丸っこい体つき、容姿はバイソンそっくりだ。　ハイタカ　が笑みを漏らすと　ケツアール　の体からもこわばりが抜けた。

「なつかれてるなあ、　ハイタカ　。お前さんたちこのまま結婚しちゃったらどうだ？　ケツアール　ちゃんはともかく　ハイタカ　、お前にゃそうそう簡単にチャンスはないぜ。どこをどうやってこんなかわいい子ちゃんを見つけてきたのやら。ちなみに　ケツアール

ル ちゃん、本名は？」

「シヨチ」

「シヨチな。覚えた」

シヨチ。ヘビクイワシ は簡単に呼んだ。

「ん、ハイタカ、なんで俺をにらむんだ？ あ、わかった、お前シヨチって呼べないんだろ！ 凶星だな？ うわー、シヨチちゃん辛かったら。何か欲しいものはあるか？ 俺に持ってこれるものなら持ってきてやるぜ。着替えはどうだ？ 食い物は？」

「食べ物は大丈夫、ピントお兄さんがくれるから……。でも着替えは。これ一着しか、もって、ないの。洗って着てた……」

「一着？ ハイタカ、お前気づかっただよ！ わかった、明日中に持ってくる。ところでピントお兄さんって ハイタカ のことか？」

「私がつけたの。呼びにくいから」

「いいな。じゃあ俺もピントって呼ぶことにするか。ピント。いい響きじゃねえか」

ハイタカ は黙って ヘビクイワシ を見つめた。

「どうした、そんな怖い顔して。あー、わかった、お前俺がシヨチちゃんと話せるから嫉妬してるんだろ。わかりやすい奴だなー。でも一番不便してるのはシヨチちゃんだ。お前が嫉妬してどうこうなる話じゃない。あ、嫉妬って言葉の意味わかるかお前？」

ハイタカ はぶいと顔をそむけ、ヘビクイワシ に背を向けて座りなおした。

「すねるなよ。俺は町の人間でお前は【鳥の民】だ、仕方ないだろ？ まったく鳥人間だよなお前……。ほっとくからな。シヨチちゃんはどこから来た？ 南の方か？」

ぼつぽつと ケツアール が答える声。ヘビクイワシ の大げさで明るい声色。やがて ケツアール の返事の中に笑い声が混じるようになってくると、ハイタカ はずるずるとその場で横になり、適当な毛皮をひっぱってきて体にかけて、目を閉じた。

「こらこら ハイタカ。まったく。こいつはいつもこうなんだ」  
ハイタカ は狸寝入りを決めこんだ。

\*\*\*\*\*

翌日、狩りから帰ると ケツアール は小屋の中で跳ねあがり、  
相手が ハイタカ とみるやがっかりした顔になった。ヘビクイ  
ワシ を待っているのだ。

ハイタカ は革の肩当てと籠手はずして床に叩きつけ、獲って  
きたケツアールの処理を始めた。

「ピントお兄さん、何かあったの……？」

ハイタカ は不機嫌に低い口笛を吹いた。「俺にかまうな」。

ケツアール は黙りこんだ。その時だ。

ギーーツ、ギギギギギギ……。

ケツアール がぱっと立ち上がった。ハイタカ が不機嫌な  
目を向けると ケツアール はぱつが悪そうな顔になって再び座つ  
たが、そわそわ落ち着きなく声の方を見つめている。

ハイタカ は低く返事のさえずりを返した。ヘビクイワシ  
のさえずりが返ってくる。儀礼通りのさえずりを交わし、ハイタ  
カ は重い腰をあげてドアがわりの革布を持ち上げた。

「よう、ハイタカ。機嫌はまだ治ってなさそうだな？ 普段は  
根に持たないのに珍しいこともあるもんだ。シヨチ！ 約束通り着  
替え持ってきたぞ！」

ケツアール はぱつと顔を輝かせ、けれどゆっくりゆっくり  
ヘビクイワシ に近づくと袋を受け取り、もごもごと礼を言った。

「あの、お金……」

「ハイタカ のお陰でたっぷり稼がせてもらってるからな。いい  
さ」

ヘビクイワシ がバイソン似の顔でにやっと笑う。はにかみな  
がら ケツアール がにこっと笑う。なるほど物に釣られたのかと

ハイタカ も機嫌を直して ケツアール の頭をくしゃつと撫で、ヘビクイワシ の荷物をつつこうとする 弟 を叱った。おおかた 弟 用に肉の土産でも入っているのだろう。二本足でぴよんぴよん跳ね回る 弟 の姿に三人で笑った。

ハイタカ が獲ってきたケツアールの肉と ヘビクイワシ が持ってきた野菜を鍋に放りこむ。今夜は鍋だ。

「まったく、お前は肉ばかりなんだからな。シヨチもいるんだから、ちゃんと野菜も採ってこい」

ヘビクイワシ の言に ケツアール がくすくす笑う。口には出さなかったが野菜が食べたかったのだろう。ほとんど肉には口をつけずジャガイモやキャベツばかり食べていた。

ハイタカ は匙を置いた。  
「どうした？」

暑い、外へ出てくる、とジェスチャーして ハイタカ はテントの外に出る。寸前、ぴよんと 弟 が肩に乗ってきた。 弟 は夜目がきかない。真っ暗になってから ハイタカ と一緒とはいえ外に出たがるのは珍しかった。

ヘビクイワシ が乗ってきたまだら馬に一瞥をくれ、その蹴りが届かない位置に腰を下ろした。一度、こうして繋がれていた ヘビクイワシ の馬が攫われたことがある。相手はパンサーだった。騒ぎに気づいて追いかけたが、まんまと逃げられてしまった。

森の歌声に耳を傾けていたが、今日のところは危険がなさそうだと判断、 ハイタカ は小屋に耳を向けた。さぞかし二人で盛り上がっているだろうと思っただが、予想に反して笑い声がぱたりと途絶えている。どうやら ケツアール が ヘビクイワシ に相談事でもしているらしい。

ヘビクイワシ にできて、 ハイタカ にできないこと。

くう、と 弟 が喉を鳴らす。 ハイタカ は 弟 の頭をなで、やっぱり自分を氣遣っていたんだな、と苦笑した。

吹き矢の筒が腰にあることを確かめる。のっそり立ち上がり、夜

の森へと。

「おいおい ハイタカ、どこ行くんだ？」

振り返れば小屋の入り口に二人が立っていた。

「帰るよ。また明日来るからな」

ヘビクイワシ には早い帰りだ。いつも酒を呑んでは真夜中までえんえん一人で話し続けているというのに。ハイタカの困惑をよそにヘビクイワシはまだら馬に鞍をつけ、ぼっくりぼっくり帰ってしまった。

「ピントお兄さん、怒ってる？」

ハイタカ は肯定も否定もせず、弟 を肩に乗せ、ケツアール をうながして小屋の中に入った。

「ピントお兄さん、ろくにご飯食べてなかったでしょ？ ちょっと待って、今、具を足すから」

ケツアール が包丁を取り上げる。とたん、滑って床に落ちた。まったく不器用な娘だ。手を広げさせてみれば、手の平に傷がある。ハイタカ は苦笑し、傷をなめてやった。

鉄の味。

不思議な気持ちになって、しみじみとケツアールの手、体のほかの部分よりは多少色素の薄い手を見つめる。

手だ、五本指の手。

弟 を呼び、翼をつかんで広げさせる。

翼だ、羽毛に包まれた翼。

迷惑顔で暴れ始めた弟 を解放し、自分の両腕を目の前にかざす。

五本指の手。

「キヨ、イ」

ケツアール とヘビクイワシ にできて、ハイタカ にできないことがある。

弟 とハイタカ にできて、ケツアール にできないことがある。

「ピントお兄さん？」

気がつくと ケツアール を抱き寄せていた。硬く硬く抱いていた。ケツアール は体をこわばらせ、されるがままになっている。ピツピツ、キョオロロロロロ……。

ああ、ケツアール。シヨチ。俺は。

俺は本当に、お前と同じ、人間なのか？

ふと背中に指を感じ、ハイタカ は閉じていた目を開いた。

「ボブさんにはピントお兄さんにした説明、しただけだよ。大好きだからね、ピントお兄さん」

抱き返される腕の力に ハイタカ はほほえみ、ケツアールの手をとると自分の手を押しつけた。

五本指。同じだ。

\*\*\*\*\*

「ハイタカ、起きてるか！」

狩りに出る準備をしていた ハイタカ は驚いて外へ飛び出した。空は薄青、夜明けは近いがまだ暗い。こんな時間に、ヘビクイワシが来るのも、お決まりの口上をすつ飛ばすのも初めてだ。

鋭い口笛。「危険があるか？」

「何もなければこんな時間に来るか！ シヨチらしい女の子を捜してるやつらが昨日、俺がここに来たあたりの時間、町に来たらしい。探してるのは十五歳の黒人の女の子だそうだ。歌がすごくうまくて、口を開けばひとりでケツアールが集まってくる。俺はシヨチの歌を聞いたことがないんだが」

同じく飛び起きてきた ケツアール の顔が凍りついている。

「しかも悪いことに商売敵が俺のことを話しやがったらしい。最近羽振りのよくなった羽細工商人がいるってな。そりゃ怪しいってことで、ハイタカ、お前のことも話されちまったみたいだ。やつら、たぶん今日中にはここへ来るぞ」

がたがた震え始めた。ケツアールを抱きすくめる。ぎゅっと目を閉じしがみついていた。ケツアールを固く抱きしめながら、ハイタカは、へびクイワシに先をうながした。

「シヨチが行きたくないなら取るべき道はふたつ。シヨチを隠すか、逃がすかだ」

ハイタカは視線で背後に広がる森を指した。森は広いし、ハイタカは町人とほとんど交流がなくとも生きていける。十分シヨチを連れて逃げ隠れできる。……が。

「俺は嘘が下手だ。酒でも飲まされりゃ、つい勢いでお前たちが森に隠れてるって言っちゃまうだろう。森は広いし、お前は町に行かなくても十分サバイバルできる。でもシヨチに、年頃の女の子にそんなこと、させられるか」

へびクイワシが服を持ってきたときのシヨチの喜びようを思い出し、ハイタカは低くうなった。

「逃がすしかねえ。俺はそう思う」

ぎゅっとケツアールの手に力がこもる。  
重苦しい沈黙が落ちた。

沈黙の中に小鳥のさえずり。ケツアールが警戒の声をあげている。へびかなにかがケツアールの卵を狙っているのだろうか。  
いや、違う。

ハイタカは警戒のさえずりをあげた。肩の上で弟が緊張する。ぱっとハイタカが手を挙げると、弟は舞い上がり一直線にハイタカの視線の先へ飛んでいった。

「なんだ、どうしたっていうんだ？」

ケツアールを背後にかばい、ケツアールのさえずりの聞こえる方をにらみつける。

「まさか、やつらか？」

ハイタカはうなずいた。直感だが間違いない。狩人の勘、森に生きる者の勘がそう告げている。

「まだ四時過ぎだぞ！　もしかしてやつら、【鳥の民】が夜明けと

共に狩りに出るからその前にと思ったのか？」

ハイタカ は ケツアール の顔を見つめた。灰でもかぶったかのような顔。白目の目立つ大きな瞳。これ以上ないほど震えている細い肩。

ハイタカ にしがみつく彼女の手をひきはがし、ヘビクイワシの方へ押しやった。たのむ、と口だけを動かし、まだら馬を指す。

「ハイタカ、お前」

弟 が上空で旋回している。見慣れないものを見つけた証拠だった。あの下に ケツアール を追ってきた人間がいる。

「ピントお兄さん、一緒に来て……」

震え声に ハイタカ は唇をゆがめ、それからくしゃりと ケツアール の頭をなでた。

同じ人間なのは間違いない。

だが、ハイタカ は森で暮らす鳥男。

ケツアール は、シヨチは、町の人間だ。

ハイタカ は口笛を吹き始めた。ケツアール の歌を吹きながら森へ分け入っていく。

「ピントお兄さん！」

ハイタカ は止まらなかった。ケツアール の叫び声を背後に、その歌を口に、黙って歩き続ける。

「ピントお兄さんーっ！」

別れの言葉を口にできないことを、「さよなら」といえないことが言い訳になるのに、感謝しながら。

\*\*\*\*\*

追っ手は ハイタカ の口笛を追ってきた。

ケツアール の居場所を聞かれた。ハイタカ は答えなかった。

最初は紳士的な口調だった。しかしすぐに業を煮やし、高圧的になった。

胸倉をつかまれかけ、さっと身をかわす。

大きく翼、いや、腕を広げ。

クチバシ、いや、歯を力チ力チ鳴らしながら。

弟 のそれとびったり重なる、さえずりの、威嚇。

(口を割らせようとしても無駄だ。俺に言葉は話せない)

俺はさえずりで話す鳥だ。人間の言葉の通じぬ鳥だ。

(ここを通ろうとしても無駄だ。ケツアール は渡さない)

俺は五本指の手を持つ人間だ。ケツアール を愛した人間だ。

殴られる。殴り返す。

蹴られる。その足にしがみつく。滅多打ちにされる。

意識が朦朧とする。口笛で ケツアール の歌を吹く。知っている

ることを言えと髪をつかまれる。

にらみつける。殴られる。

威嚇のさえずりをあげる。頭のおかしい男だと殴られる。

やがて殴り飽き、ケツアール を求めて去っていく。

「キヨ、イ……」

彼らに悟られることはない。その名を呼ぼうとしても。

「ケツアール ……」

静かに、ゆっくり、口笛を吹く。

……Fin

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9684q/>

---

ケツアール、歌ってくれ

2011年11月16日14時33分発行